

2022.2.17 (木)
第26回例会
(通算3653回)

2020-2021年度 釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン『我がロータリーを楽しむ。我が地域を育む。』

第85代会長 杉村 莊平
副会長 浅川 正紳
幹事 市橋 多佳丞
編集責任者 クラブ会報雑誌委員会

例会日 毎週木曜日 12:30～13:30 夜間例会 18:00
例会場 釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局 釧路市錦町5-3 ミツ輪ビル2F
☎ 0154-24-0860 📠 0154-24-0411

2021-2022年度
国際ロータリーテーマ



幸仕しよう みんなの人生を豊かにするために

2021-2022年度
RI会長 シェカール・メータ
第2500地区ガバナー
漆崎 隆 (釧路ベイRC)

月間テーマ	平和と紛争予防／紛争解決月間
本日のプログラム	「私のこわいもの1!2!3!」(担当：プログラム委員会)
次週例会	釧路市長講話「つながるまち・ひと・みらいひがし北海道の拠点都市・釧路」(担当：プログラム委員会)

- ロータリーソング：我等の生業
- ソングリーダー：小西 卓哉君
- 会員数 103名
- ビジター なし
- ゲスト なし

会長の時間 杉村 莊平会長



皆さん、こんにちは。本日も多数のご参加をいただきました。ありがとうございます。少し席が足りなくなるぐらいの嬉しい悲鳴で、本当に

ありがとうございます。

先ほど、ネットを見ていたら政府のコロナ専門チームから発表があり、「第6波が2月上旬でピークを過ぎた」という発表があったようです。まだまだ気をつけなければいけません。何とか出口の明かりが見えてきたという気がしております。まん延防止が少し延びて3月6日になったようですけれども、引き続き十分気をつけながらも前を向いてしっかりやっていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

ネタに困ってきている昨今でございますが、2月に入りまして、2月と言えば『バレンタイン』ですが、皆さんはもうあまり関係がないかもしれません。僕も歳のせいなのか、コロナやオリンピックのせいなのか、昔に比べてこのバレンタインが盛り上がり欠けてきているようでございます。

思い起こすと、僕の小学校・中学校ぐらい、40年ぐらい前が、一番バレンタインがガチンコで盛り上がっていたころかなと。そのころはまだ義理チョコなる制

度もなくて、結構真剣にチョコのやり取りが行われていたような気がします。ということをお考えますと、当時の小学校・中学校ぐらいの思春期男子においては、貰えた方は良いですけれども、私を含めて貰えなかった大多数の男子において、このバレンタインデーとは、このロータリー精神とは相反する真逆な「人生とは不公平なものだ」ということを学ばせていただいた大事な日だった、なんて思ったりしております。

あと、お知らせいたしたいことは、本日は『こわいもの1.2.3』ということで例会を行います。そのコロナに関して夜例会や事業が中止になったり、地区の事業もなくなったりしてしまっていて、工藤委員長をはじめとするプログラム委員会の皆さんには、本当にご苦労をおかけしております。来週の蝦名市長は来ていただけると聞いておりますけれども、やはり会員卓話中心の例会になるかと思っておりますので、声をかけられたメンバーにおかれましては、まさにせっかくの機会・ロータリーを楽しむということで、気持ち良くご協力をいただければと思います。これからも引き続きよろしくお願いたします。

僕の「怖いもの1」を話して終わりたいと思っております。少し考えますと僕がいま怖いものは、地震と津波です。というのも、自宅は少し高台にありますから大丈夫だと思っておりますが、僕の事務所は街の真ん中に小さい平屋で建っています。多分、地震と津波が来たら一巻の終わり、向かいに防災庁舎がありますから、これを目

がけて社員一同で退散して行くしかないと考えているところ。そう思って釧路沖の地震を調べてみたら、やはり専門家側からすると、先日は週刊誌などにも大きく出ていましたが「間違いなく100%来る」ということのように。

この根拠は4つあるようで、1つは「沈降」といって、沿岸部の沈み込みがあり、これが1955年の調査以来ずっと沈み込みが進んでいるようで、マグニチュード8や9ぐらいにならないと沈み込みが治まらないことがひとつ。

もう1つが、「引っかかり」というものです。本来、陸側のプレートに太平洋プレートがうまく滑り込んでいる状態が普通ですが、釧路沖が解析調査の結果、うまく入っていない状態で、この大きい引っかかりがあることが2つ目。

3つ目が、内陸地震の頻発。東北の震災を例にとると、東北の震災は内陸で大きな地震があった3年後に大地震があったのですが、これを北海道に当てはめると2018年に胆振東部地震が起こっています。ということで、北海道はしっかりその段階に入っているようです。

4つ目、最後が周期的な問題です。釧路沖はこれまでの調査の結果、間違いなく350年に一度ぐらい大地震が起きているようで、最後の大きい地震からもう400年経っていることが根拠のようです。「100%来る」と言っても、明日来るのか、10年後、20年後に来るのかが分からないことがつらいですが、皆さんもせっかくですから家と会社の防災用具ぐらひはしっかり準備していただいて、備えをと思っております。

最後に、不動産に関して地震と津波についての市況をご報告したいと思います。最近、いわゆる「釧路の山の上」と言われる「緑ヶ岡・宮本・浦見・住吉・鶴ヶ岱、この辺りに移りたい」と、家に移りたい、土地を求めたいという方が多くいる傾向になってきております。ただし、「上に行きたいけれどもあまり奥には行きたくない」という皆さんの要望が強く、そうなると、そのエリアが山や坂が多く、平坦な土地がないことで、皆さん探していますけれども「希望に合う土地が見つからない」ことが多いと思います。

また、事務所・事業用地については、山の上は元々住宅が多かったことがありまして、都市計画で『用途地域』というもの指定されています。そもそも事務所・事業所を建てられる用途地域の指定が少なく、土地が空いていても「ここは事務所や倉庫は建てられない」という地域が結構多いのです。そういうことで、「事務所も山の上に」という方も結構いらっしゃるんですが、まとまった土地もない中で見つけられずにいるのが最近の不動産市況でございます。

釧路の街づくりを考えた場合には、やっぱりこの需給ギャップをしっかりと捉えた上で、これからの都市計

画・街づくりをしていただければ、と思っておりました。

本日は、バレンタインから都市計画の話まで大変高尚な会長話を披露させていただき、お終わりにしたいと思います。

ネタに大変困ってきておりますので、皆さん何かありましたらぜひアドバイスをいただければと思います。今日はよろしく願いいたします。

幹事報告 市橋多佳丞幹事



皆さま、こんにちは。津波が来ると真っ先に飲み込まれる会社が私の会社です。海辺に建ておりますので、津波が来ないことだけを

願っている者でございます。

本日の幹事報告です。他クラブの例会は、お配りしております例会案内をご覧ください。また、本日例会後に第8回の理事会を開催させていただきます。理事者の皆さまにはローズホールへご移動をお願いいたします。

以上でございます。

■本日のプログラム■ 会員卓話「私の怖いもの。1! 2! 3!」

プログラム委員会 工藤 彦夫委員長

プログラム委員会です。5週の連続になります。今日は『私のこわいもの』ということで会員卓話ですけど、趣旨については先ほど会長から言われたとおり、夜例会ができないので夜例会で話すようなことに題をつけて何回か行いたいということです。夜例会が始まれば行きません。この会員卓話については、会長が「年間アワードを誰か1人選びたい」と、自腹でお金を払っていただけるというお話を聞いたので、ぜひとも。今日は4名の方に話をさせていただきますけれども、よろしく願いいたします。

今日のお題は『私のこわいもの1.2.3』ということで、いままで怖かったことや昔に怖い経験をしたという話をしていただきます。6分ぐらい話をさせていただき、6分以上話すと「チーン」と鳴ります。その方はフェードアウトをして次の方へ回していただきます。

まず1人目、村上祐二君、よろしく願いいたします。

村上 祐二会員

皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた村上です。トップバッターということで少々緊張しております。『私のこわいもの1.2.3』という



ことでお話をしたいところですが、1月の例会でこの会員卓話がなくなったものと思って、とっておきの私のこわいものをそこで言ってしまったものですから、今日は全然違う話、SDGs についての話をさせていただきます。

もう皆さんご存じのとおり 2015 年に国連で採択されたこの SDGs です。17 の目標を掲げて持続可能な社会を目指そうと行っておりますけれども、きっと「日ごろ争っている国々、紛争地域の人々もこの 17 の目標だけは一緒に行おうではないですか」がポイントだと思います。私もその SDGs を最初見た時に、ウチみたいな零細企業には関係ない話だろうと思って見て見ない振りをしておりました。

それから月が経って、5 年ぐら前に広島隣の福山市のとある会社に企業視察に伺いました。その会社へ行ったのは、別に SDGs のことを知りたくて行ったのではなく、他に目的がありました。

ところが、その会社の説明が始まると、その当時、既にこの SDGs を会社にうまく取り入れていて、びっくりしました。簡単にいうと近江商人の「売り手・買い手が満足するのはもちろんのこと、社会に役に立ってこそ良い商売と言える」ということを SDGs とくっつけてうまく作り上げていました。「これはすごい」と思い、影響されやすい単純な私ですからすぐに会社へ戻って私もやってみようと思って、やり始めました。現在ウチの会社では今、この 17 の目標のうち 13 の目標に取り組んでおります。その中で、10 番目の目標に「人や国の不平等をなくそう」というものがあります。これを最初見た時に「これはパスだ、ウチでやれることはない」と思いました。でも、何か気になって「ウチみたいな小さな会社がこれを 10 番目の目標として取りかかるにはどうしたら良いか」と考える時があって、いろいろ考えているうちに行き着いたのが、障害者の雇用です。

単純ですから、これをやってみようと思ひやってみました。障害を持った方々は働く意欲があっても働く場所が足りないことは私でも分かっておりました。でも、それこそ見て見ない振りでした。いざ、彼らの仕事をウチの会社でどのようにできるかを考えて、いろいろとチャレンジはしてみるのですけれどもなかなかうまくいきません。工場の中での安全性などを考えるとまくいかない。いろいろ試行錯誤、紆余曲折があっ

て行き着いた「OA 機器の分別解体」をいま仕事にしてもらっています。

これは使われなくなったパソコン類を企業から出されてきて、それらを様々な道具は使いますが手作業で素材ごとに分解をしていきます。そうすることによってリサイクルがされやすい形状になりますので、売却するときの価格がグンと上がります。そのように言うと「うまいことをやっている」と思われるかもしれませんが、これもまた大変でした。大変というのは社長の私が未熟だったから大変だったのですけれども。

つまり、障害を持たれた方の仕事と健常者の仕事を比べてしまうのです。例えば 1 kg あたりの処理コストを健常者の方と障害を持たれた方を比べてしまうのです。そこでマイナスのところが出る。そのマイナスのところを切り取って「これはいけない」と悩みます。そうこうしているうちに、なかなか解決もしない。そして「もうこの事業を辞めてしまおう」というところまで行きますけれども、いろいろなことがあって「マイナスの部分は果たしていかほどなのか」に考えが着きました。会社全体の中で、マイナスの部分はいかほどなのか。会社の中のマイナス部分を改善できないことは良くないことですが、まずはそこに行き着きました。そして次に思ったことは、ロータリークラブでいう職業奉仕で良いのではないかと。比べてマイナスの部分があればこれは職業奉仕として考えれば良いのではないかと、というところに行き着きました。それからいろいろな歯車がうまく回って、おかげさまで今はうまく行っています。

今日お話をしたかったことは、SDGs はなかなか取っ付きづらい。これから始める方、あるいは始めているけれども少々問題を抱えている方、そのような方がもしかするとこのロータリークラブでいう職業奉仕を照らし合わせるとうまく丸く収まることもあるかと、そのような話をさせていただきました。

最後に、今日私の怖いもの、浅川さんの次に怖いものをお伝えして終わらせていただきます。私の怖いものは、「SDGs 掲げた会社 持続せず」。

以上でございます。ありがとうございます。

篠原 実君



皆さん、こんにちは。村上さんの立派なお話の後、私のくだらない話に少しお付き合いいただきたいと思ひます。『こわいもの 1.2.3』と

いうことですがけれども、いままで少々怖い思いをした。それといま考えてもゾクッとする体験談をお話したい

と思います。

まず、1つ目です。30年ほど前、十勝の清水町で暮らしていました。そのころ上の子がまだ2歳ぐらいでした。嫁の実家が旭川の隣の当麻町にあるものだから、金曜日に仕事が終わって、夕暮れに家を出て向かいました。狩勝峠の登り口の所で、長時間の運転をするからトイレに行こうと思い、後ろに乗っている嫁と子供に「トイレ大丈夫か」と聞くと「寝ているから大丈夫だよ」。「僕、行ってくるね」とトイレへ行って、戻って、そのまま峠へ上がって行きました。僕は普段車を運転するとあまり喋らない方ですけども、ちょうど頂上辺りで後ろに声をかけたら全然応答がないのです。消えたのです。娘と嫁が消えました。あれ、どうしたのだろう。

そのころはまだ携帯電話もないので、「あれ、ひょっとしたら」と思い、峠の下のトイレまで降りて行くと、2人が立っていました。それをいま考えると、そのまま嫁の実家まで無言のまま到着して「着いたよ」と言って振り返って、いなかったら、といういま思ってもすごく怖い、ゾクッとする思い、それが1つ目です。

2つ目です。これは6～7年前です。私が小樽に単身赴任をしていたころ、旭川の家に戻って普通に夕食をとり「疲れたから今日は先に寝るね」と2階の寝室で寝ました。グッスリ寝たつもりだったのですが、普段はそのようなことはないのに気配を感じ、何だろうと目を開けると、僕の目の前10cmぐらいに前に顔があるのです。わ～っと思い、何だろうとよく見ると、嫁が覗いていたということがありました。いま単身でいますけれど、いまでも夜、目を開けることが怖いのです。嫁がいないことは分かっていますけれど、目を開けて何かが見えたらというトラウマの思いが2つ目、いまでもちょっと嫌だと思っています。

3つ目です。これもあまり面白くない話ですけども。これも30年ほど前、十勝にいるころです。私は電気の仕事をしておりますので、新得町のサホロに小さな水力発電所があるので、そこの電気のメンテナンス関係でお邪魔をしていたころ、「夜10時30分から朝2時30分過ぎぐらいまで、電力さんの配電線の工事があるので発電所を止めてくれ」と申し受けまして、僕がその時担当でした。夜1人で、コンクリートダムですけども、ダムの下の下流の方に車を止めて、ダムの中へ入って発電所を止めに行きました。発電所を止めるまではダムのでっぺんには照明が付いていて結構明るいのです。周りには何も照明がありませんけれど、発電所を止めてダムの中の百何十段もある階段を出てきて車までたどり着くまでが真っ暗なので非常に怖いです。

気が小さいから怖かったのかもしれませんが、車にたどり着くまでに「何かの手が伸びてきたらどうしよう」とか、いろいろなことを思いながらやっと車

までたどり着いて、とりあえず一旦、家に戻りました。今度は、発電機を回しに行く時明け方2時30分ぐらいの丑三つ時。その日は霧雨が降っていて、超怖いシチュエーションのときでした。同じようにダムの下まで車で行って、車から降りて車のライトを消すと当然真っ暗です。川の流れる音が聞こえて、雨が降っていて風が吹くと葉っぱが「サラサラサラ」と。もうどうしようと思うぐらいに怖い思いの中、ダムまでたどり着いて発電機を立ち上げて、出たころには照明が付いているので、少しホッとした状態でした。いままで40年近く、この業務を行っている中で一番怖い思いをした状況でした。以上でございます。

ありがとうございます。

佐藤 貴之君

佐藤です。先週、急に代打のお話がありまして、私に怖いものがあるかなと考えていましたけれども、ちょっとロータリーネタになってしまいます。



いまから4年前、邵さんが会長の年度に私は副幹事を仰せつかっておりました。当時は邵さんが会長、副会長が工藤さん、幹事に後藤さん、もう1人の副幹事がキャスルの浅野さんの5名でやっていました。このメンバーで、昨年12月、「後藤会長ノミニ」が発表になった時に「これはめでたい。お祝いをしよう」というお話で邵さんから招集がかかり『鱗』に集まったのですけれども、その場に集まった人が邵さんと後藤さんと私の3名だけでした。ちょっと怪しい雰囲気ですけれども、3名しかいない。工藤さんも集まりましたけれど、ちょうど情報集会があって始めだけ顔を出して情報集会へ。浅野さんは全く来る気がなく函館にいるという感じで。3名で夕方6時ぐらいからお祝いをスタートして本当に楽しい。私も本当にお世話になって、すごく尊敬をしている先輩ですので3人で12時ぐらいまで6時間ぐらいいました。

楽しかったですけれども、途中お酒が入ってくると、後藤さんから当時の邵年度のお話が出てきました。当時、私と浅野さん副幹事で、いま思えば全く仕事ができなかったと。後藤さんから「当時、工藤さんが『副幹事をあまり使い過ぎるな。副幹事がアップアップしている。もう副幹事は限界だ』というようなお話をしていた」と。それが後藤さんは私と邵さんと3人いる場所で「全く腑に落ちない、俺は納得していない」みたいなお話をされまして、3人しかいない間で、私からしたらもう「サーッ」ですよ。皆さんは後藤さんの人柄を分かっていると思うので、面白おかしく当時

のことを言っていましたけれど、私からしてみたらもうサーッとこのロータリーの先輩後輩の立場を思い知らされたというか。

少し話が長くなるかもしれませんが、当時どのようなことを私と浅野さんが行っていたかという、副幹事をやられていた方は分かるように、日報を書いたり例会の準備をしたり。そのころ親睦でちょっと委員長がいなかったり、メンバーがなかなか集まらなかったり、という機会が多く「まずは『ロータリーの友』が来ていたら親睦がやる前に、まずやれ」と棚に2人で入れたり、最近はありませんけれども夜間例会の度にお金の徴収、それから司会、それもいま思えば、得地さんや田内さんもやられています。あとは『地区大会PETS』へ行ったら、まずは朝早く起きて、朝早く釧路へ戻る方がスーツを着た段階でお見送りをする。皆さんがお食事をする時には、入口に立って待っているという感じ。それは何だろう、次の年、村上さんと市橋さんが副幹事をやられていましたけれども、その方たちも『くしろナイト』の時も一切ご飯も食わずにずっと直立で立って仕事をされていました。いま思えば本当に当たり前のことばかりですけども、当時の私たちは本当に限界だった。アップアップしていた。それを工藤さんが察したのかなということがあって、多分、いま思うと後藤さんは全く納得をしていなかったのだらうと思います。

どうなのだろう。『地区大会』、今日は吉田潤司さん本人がいらっしゃるの、話しづらくて。本人には、「今日、話題にさせていただきます」とお断りをしています。

潤司さんの時の地区大会、皆さんもご存じの方がいると思いますけれども、以前いらっしゃる馬場さんが、皆さんの印鑑をついているところで、公開で怒られたのではなく強めに指導をされた感じ。私は市橋さんと国際交流センターの担当だったので全く分からないのですけれども、聞いた情報によると。それは全体の流れを考えて成功させるための指導だったというか。

後藤さんは「全体を見て美しくなければいけない」という言葉をよく言います。当時、私たちが副幹事をやっていた時も「『ロータリーの友』が置いてあるのに誰もやらないのは美しくないよね」、多分、そういうことだったと思います。私たちは来てプラプラしてただけだったので、後藤さんは当時から、来たらずぐパソコンをガツと。仕事量がすごかったです。それに比べると私たちは本当に何もしてなかった。全体的な美しさと流れを考えてやっていたのかと少々強く感じておりました。

本当はもっと喋りたいことがたくさんありますけれども。すみません、1.2.3の1で終わってしまいますけれども。

私もそうですし、工藤さんもそうですし、もちろん邵さんもそうですし、すごく尊敬をしている先輩たちでございます。邵さんももちろん後藤さんのことをすごく信頼していらっしゃいます。私、できれば何かをやらせてくれというわけではなく、これからは機会があれば後藤さん・工藤さん・邵さん・浅野さん、また同じメンバーと一緒に仕事ができればという思いが強くなります。いまでも当時のグループLINEがあって、誕生日には「おめでとう」など、本当に良い仲を保っていて、できればまた一緒にお仕事がしたい。どなたかがガバナーになっていただけると私はまた何かができるという思いがございます。

私は市橋さんと違い、あまり仕事はできませんので、私はできれば副幹事の位置が一番力を発揮すると思います。できれば副幹事を何度かやらせていただくと良い仕事をすると思いますけれども、そのような立ち位置で、怖かったと言いますか、ピリッと気持ちを入れられたお話でした。

お時間が来てしまいましたので、以上とさせていただきます。ありがとうございます。

荒井 剛君



皆さん、こんにちは。荒井です。『こわいもの』というテーマとあまり関係なく喋っても良いのだと思いましたが、一応『こわいもの』というテーマをいただきましたので考えてきました。

1番目・2番目は本当に軽いものですが、3番目は過去に怖い思いをした経験談をお話したいと思っています。

最初は、簡単どころでいうと高い所。私以外でもたくさんいらっしゃると思いますけれど、いわゆる『高所恐怖症』、極度の高所恐怖症なので2階へ行くのも怖い、階段を上ることも怖いです。例えば、スカイツリーの上へ行くと、下が透けて見える透明なガラスがあって、そこを歩くことをみんな喜んで行っていますが、頭がおかしいのではないかとと思うほど本当に僕は怖いのです。

こちらではあまりありませんが、東京に住んでいたころは、よく横断歩道の代わりに陸橋があって陸橋を渡らないと行けない所があるのですが、その陸橋の幅も向こうから人が来ると避けなければいけない狭い所で、あそこを渡ることが本当に怖い。この思いを共有していただける方がいれば嬉しいですが、高所恐怖症だということで1つあります。

ただジェットコースターは大好きです。あれは自分がそこへ行っているわけではなく、勝手に機械が動いて

くれるからです。例えば自分がホテルの高層階の窓辺から下を見るなどはあり得ない。そこがちょっと嫌だということが1つ目です。

2つ目は、本当かと思われるかもしれませんが、いわゆるゾンビです。ゾンビ映画は最近ではよく出ていますし、Netflixでもゾンビが出てくるようなドラマが流行っていたりしていますが、ゾンビ映画を見てちょっとしたトラウマになった。

少々篠原さんの話と似ているかもしれませんが、2007年に公開された映画で、ウィル・スミスが主演をしていた『アイ・アム・レジェンド』という映画がありました。当時釧路のイオンシネマで、確か妻だったと思いますが観に行っただけです。

どのような映画だったかという、時代設計は2012年でした。世界の人類がウイルスに冒されてほぼ絶滅している。唯一、ニューヨークで生き残った1人がウィル・スミス主演のその人だということで、どのように生き抜くかということです。では、ウイルスに罹った人類はどうなっていたのかという、汚染されてしまっただけで太陽光を浴びられない、太陽の光を浴びたらすぐ死んでしまうような、退化したのか進化したのかよく分かりませんが、太陽の光を浴びると死んでしまうから暗い所にしかいない。

そうやって人類の一部が汚染されてゾンビ化したものを「ダークシンカー」という言い方をしていたのですが、その映画の中でウィル・スミスがダークシンカーに襲われる場面があります。それがものすごく怖くて、それ自体はそのような映画もいろいろあるから良いのですが、その映画も「怖かったね」「面白かったね」という感想を言っていましたけれども、問題はそこから2～3週間後でした。

ある夜に、自分の夢でダークシンカーが出てきました。ダークシンカーに襲われる夢を見て、僕は「ギョッ」として大声を上げているのですが全く声が出ない。これはいわゆる金縛り状態に初めてあったのがその時でした。それでも本当に怖かったから、頑張って大声で「ギャー」と叫んでいるつもりですが、ただ口がパクパク空いている状態だったのですが、それでもさらに力を振り絞った時に、ふと金縛りが解けたのです。解けてしまった方が良いのですが、そのままの勢いで「ギャー」と叫んでいて、夜中に自分の声にびっくりして飛び上がって起きたのです。冷や汗をかいて。一番びっくりしていたのは隣に寝ていた妻だったと思いますが、それが一度だけではないことが怖いのです。しばらくしてまたどこかの時点で、また同じような夢を見て金縛りにあって、声が出ないという体験をしたので、ゾンビ映画を観たりすると、そのトラウマがまた襲ってくる。それが怖いということ、いわゆるゾンビで怖いという意味になります。

3つ目は体験談です。若気の至りだったのだろう。

それが言ってみれば怖いと思う話です。30年前の話です。私が高校生のころ。

高校生のころは父親の転勤でアメリカに住んでいました。アメリカのカリフォルニア州は当時16歳で車の免許を取得することができましたので、私も生意気にも車の免許を取って、生意気にも少々スピードが出る車に乗っていた時の話です。

アメリカに住んでいたのも、とにかく人から「何があっても謝るな。アムソーリーを絶対に言うな」と叩き付けられていた時の話です。

ある国道を二車線で走っていた時に、僕の横の車が信号待ちをしていた時に、パッと見るとアジア系の僕と同じくらいの高校生がかわいい彼女を隣に乗せていました。腹立つなと思いながら、しかも車がトヨタのスーパー。結構なスポーツカーだと思いますが、僕の車より明らかに速いですが、生意気だと思いながら、腹立つなと思いながら、信号が青になった瞬間に彼の車がスッと行ったので「ふざけるな」ということで追い越して、抜きつ・抜かれつのレースをしました。そうすると直線道路だから信号が赤になって結局停まってしまうわけで、パッと隣を見ると向こうもこちらを意識して何か「グダ、グダ」文句を言っていることは分かってきます。でも窓は閉めていたし、放っておこうと思っていましたが、まだグチャグチャ言ってきたので止めれば良かったのですが、私は彼に対して指であるジェスチャーを示しました。そうしたら車から降りてくることを察したのですが、降りるばかりではなくて、トランクまで行ってトランクを開けてバットを取り出して襲いかかろうとしてきました。

さすがに横に彼女もいるのだからそのようなことはしないだろうと思っていましたが、すごい表情で迫ってきたので「絶対にアムソーリーと言うな」と言われていましたが、これは仕方ないと思って、窓を開けて「アムソーリー」と言ってスッと逃げた、ということがまず1回目の事件です。

だけれど私も若いので「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ということわざがあると思いますが、それからまた3カ月から半年後だったと思います。また同じように国道を走っていました。

そうすると隣に中古の車、単なるゼダンだったと思います。こちらも調子に乗ってスピードを出していましたが、それでも付いて来ました。すぐに前へ出るから「なに」と思ってこちらもスッと出たら、また付いて来て「なんだ、このおっさん」と思って横を見たら典型的なアメリカ人で中年だったと思います。変なおっさんがいるなと思って、それでもいいやと思ってさらに抜かして行ったら、やっぱり直線道路なので信号待ちで停まってしまうのです。私はその交差点で左折をしようと思ったから左端の左折専用レーンで停まっていた。そのアメリカ人は1つ車線をおいて右側の車線

で直進をしようと停まっていたと思います。そこで私がチラッと見たら、またこちらを見ているのです。全然、言ってもいないですけども「このアジア人、なんなのだ」と言っているように私は感じたわけです。私も止めればいいのに、また先ほどのジェスチャーをしたわけです。そうしたらモゾモゾしているなと思ったら、後部座席から取り出してきた物がライフル銃でした。おもちゃのライフル銃は見たことがないし本物ではないか。ここはアメリカだよな。アメリカでは銃はOKなはずだから、これは本気だ。ライフルをこちらへ向けて撃ってはいないと思いますけれども、向けたのでこれは本当にヤバイ、自分は死んでしまう

と思ってあまり記憶はありませんけれど赤信号でしたが、信号無視をしてすぐに左折してそのまま猛ダッシュで逃げて何とか逃げ切ったというお話です。これが、「若気の至りは怖い」という私の経験談が3つ目ということです。このような話ですみません。以上です。